

伝承の爪籠つまごづくりに丹精込めて

町内ただひとり
残るわら細工作り
名人、沢田正夫さ
ん(95) 〓岐登半
〓は今、ミニチュ
ア版の爪籠(つま
ご)製作に情熱を
傾けています。



「一日に2足くらいしかつくれないさ」と伝承の手仕事に精を込めています。富山県から伝わった雪沓(ゆきぐつ)の一種。わらじと違って足と指先が露出せず、足の甲から指先までを覆っているの、冷たい雪から足先を守ることが出来ます。かかととくるぶしをたすき掛けに縛って固定するため歩きやすいのも特長。

富山県から最初に開拓移住した入植3代目。50歳を過ぎたころ、父作次郎さん(96歳で逝去)から習ったそうです。「母親が足底の台を作って、父親が上の覆いを作っていた。旭川の兵隊(旧日本陸軍第7師団)の将校から兵卒まで履いていたよ。一日履いても切れないと言って、いっぱい注文が来た」と貴重な現金収入だったよう。

戦後、農村の近代化とともに、手仕事の農村文化も消え、最近まで約50年

間すつかり遠ざかっていました。「あんなし
か作れない、と山崎さ
ん(山崎芳光さん)に
言われてね」と再び取
り組み始めた技は、今
も健在。手慣れた手つ
きで編み進めます。

本来は稲わらで編むそうですが、上質な稲わらはもう手に入らないといい、夏に近くの倉沼川河川敷でイネ科の多年草、葎(ヨシまたはアシ)を採り貯めて乾燥させ、足底部分を編み貯めしました。「下を作ってみたら120個も出来てしまったよ」とこれまでに8足ほどのミニチュア爪籠が完成しました。120足の完成目指して丹精込めた作業が続いています。

走る調理カー、農協に新登場

移動販売試食PR用途に使えるキッチン・フードトラックが東川町農協に誕生しました。11月16日、東川神社で納車式を行いお披露目。松岡市郎町長が樽井功組合長に黄金の特大型レブリカーを贈りました。



同車で初調理した田園そばを約40人が試食して使い勝手を確かめました。東川町農協青年部(山崎浩敬部長)、同女性部(金巻富士枝部長)、同フレッシュミズの会(宇山夕香里会長)や東川町

「JA移動キッチン・フードトラック」と名付けました。自慢の東川米、ひがしかわサラダのおいしさを全国にPRと活躍に期待をかけています。地方創生の交付金370万円を使っ

て町が全面助成。軽4輸貨物自動車をキッチン・カーに改造して引き渡ししました。100リットル貯水・排水タンク、エンジンを切っても外部電源で稼働する食品保管設備を完備しています。

商工会、東川観光協会が中心となって各地のイベント会場などに出向いて東川の農産物試食、販売など、おいしさの魅力発信に役立てることにしています。

初出動は、同月23日北海道神宮(札幌)で行われた新嘗祭(いなめさい)。東川米「ななつぼし」を使った稲荷ずしと東川産のそば粉を使用した神宮そば500食を提供しました。

「P.E.T.」を体験しよう

11月10日、上川管内中央部の小、中学校の体育担当教員約50人が参加して上川管内学校体育研究会(会長・高橋俊夫愛別小学校長)主催の第29回上川管内学校体育研究大会東川大会が町内で開かれました。

東川小、東川中2校で公開授業を行

いました。研究主題は「できるを実感し、やりたいと思う体育学習」。今年から3年計画で始まった新しい研究テーマです。東川小では機械(マット)運動、東川中では剣道の授業を通



じて「できる」を実感できる公開授業を見学。美瑛小教員の瀬戸健吾さんが「ボール運動『ベースボール型』を考える」を研究発表し、「低学年からの多様な運動経験が大事」などと指摘しました。